

第八章 終戦前後

東条英機内閣のあとを受けて、昭和十九年七月に成立した小磯国昭内閣の蔵相には石渡荘太郎が留任したが、昭和二十年に入って石渡は内閣書記官長に移り、そのあとを津島寿一が襲った。

津島は書いている。

「昭和二十年二月中旬、私（当時北支那開発総裁）は北京から東京に来て、事務打合せ中であつたところ、突如二月二十一日、小磯総理の要請で大蔵大臣に就任した。ところが、閣議その他で知つた戦況は遠く北京で想像したものとはまるでちがつて非常にわるい。私は苦惱を深くしたのである。空襲は日に増し激化してある。とくに、三月十日の東都下町方面一帯の空襲は、未曾有の猛撃であつた。私はその翌日、罹災地一帯を視察したが、その被害の甚大さはほんとうに驚くべきものがあつた。

当時、帝国議会は開会中であつた。目前の惨害善後策、それに将来の空襲罹災対策などを考えると、既定の予算では到底賄つていけないということを感じた。……私は、多少うるさいことはあつても、この際、堂々と必要経費を追加予算として要求し対策に遺憾のないようにすることが、正道であると主張し、急ぎよ二十億円の追加予算案を作り、これを議會に提出した。議會では、戦局の悪化から、一般政策に対して幾多の論議があつたが、追加予算そのものは議會自身も必要として賛成し、無難にその通過を見たのであつた。」（津島著『芳塘随想』第六集）

予算増額の必要を感じた津島蔵相は、就任後、一週間目に初人事を行い、これによって東京財務局長池田勇人が本省の主税局長に起用された。『税の鬼』という評価が物を言ったわけである。津島蔵相の秘書官には、大平の一年先輩の黒金泰美が任命されたが、翌月（三月）の十九日には、大平も秘書官事務取扱を命ぜられた。

「私は生まれ落ちてからまさか秘書官稼業をやるうなどとは夢にも思ったことがなかった。大学を出て役人になってから、大臣とか秘書官とかいう人種とは凡そ縁もゆかりもないものど心得ていた。

……津島さんは麹町の下二番町の邸宅に住わっていたが、古い歴史と伝統に恵まれた永田町の旧大蔵大臣官邸を愛されてよくそこでお仕事もされ寝泊りもされたものである。私は相棒の黒金泰美秘書官と交替で宿直することにして、当時空襲が漸く激しくなったが、不思議に私が泊った晩に限って空襲があるので一同にひやかされていた。奥様や女中を連れて官邸内の防空壕に退避したものであるが、大臣は空襲があっても一向に平気で別に普段と変ったことがなかった。私がかましくいつてやっとな退避してもらったものである。」（『素顔の代議士』）

また、大蔵省二年後輩の谷村裕（現東京証券取引所理事長）は、石渡前蔵相の秘書官事務取扱だったが、そのまま勤務するよう命ぜられ、二週間ほど津島に仕えた。

「黒金、大平両先輩秘書官の驥尾に附して、朝は滅法早く、夜は真夜中までという津島大臣の抱持をさせていただいたが、灯火管制下の大臣のお宅で、夜遅くまで大臣の悲憤慷慨の言葉を神妙に承っておられた大平さんの姿が、今でも目に浮かんでくる。」（『回想録』追想編）

戦局が最悪の状態に近づいてきたことを悩んだ小磯内閣は、蒋介石の重慶政府と和平を結ぶ案をつくり、三月二十一日の最高戦争指導会議に提出したが、重光葵外相はこれに強く反対し、その結果は内閣の総辞職につながった。

津島の蔵相在任期間はずか四十五日であって、その事蹟は、さきの追加予算案の提出と議決ぐらいで、特に記録されるべきものはなかったが、大平は最初の秘書官稼業で、我儘な殿様然とした津島蔵相の面倒をみるために、人に知られぬ苦勞をする一方、物事を大所高所から見る機会を与えられた。

その頃のことを佐々木栄一郎（現丸茶社長）はこう書いている。

「戦時中、安孫子藤吉氏（のち自治相）の紹介で初めてお会いした当時、大平さんは津島寿一大蔵大臣の秘書官だったが、坊主頭で半ズボンという格好で現われ、話も素直で実に飾らない人だなという印象を受けた。……大平さんは日本が敗けることは何より残念だが、今の日本のように軍部独走でもし勝ったとしたら恐しい世の中になるだろう。そしてそのよくな日本は早い時期に倒れる日があるのではないか」と当時としては思い切ったことを話していた。」（『回想録』追想編）

おそらく大平は、日本の将来の動向を、津島蔵相を通じて十分に把握していたのであろう。

小磯内閣のあとには、鈴木貫太郎を首班とする終戦内閣ができ、蔵相には広瀬豊作が起用された。大平は、津島の退官とともに、主計局へ戻った。

昭和二十年五月二十五日夜半の帝都大空襲の日には、たまたま田中豊前大蔵次官以下のメンバーが津島邸の庭に集まって酒を酌み交わしていたが、B 29爆撃機の編隊は、次から次へと東京上空に侵入し、焼夷弾の雨を降らせ、津島邸にも火がついた。

「私は津島夫人と女中さんを連れて逃げ出した。ところが途中で、突然夫人が『仏壇に観音様を忘れたので、お迎えに来てほしい』といわれるのであった。私はすぐとって返し、火災の中で観音様を救い出したものの、夫人たちの一行とはぐれてしまった。ずっしりと重い金属の像であった。それを抱きかかえながら四谷駅へ向う途中、一、二メートル離れたところに、焼夷弾を包む大きい鉄の輪が落ちた。直撃を免れたものの、身の危険を感じた私は、駅長室に観音様を安置して単身逃げ、市ヶ谷駅の近くのトンネルで一夜を明かした。翌朝、観音様を迎えた私は、やっと下二番町の詰所で、津島一家と無事再会することができた。津島邸のあった場所にも行ってみたが、もちろん津島邸は全焼して跡形もなかった。

それから私は、牛込の自宅に帰ったが、ここも家内のさともるとも全焼していた。ピアノ線が鉛のように横たわって、霧雨がしとしと降っていた。私は世田谷の烏山の借家に移り、そこから同じく世田谷の桜上水に疎開していた主計局に通いながら、終戦を迎えたのである。

昭和二十年八月十五日は終戦の日である。私は中村建城主計局長、河野一之予算課長等とともに、桜上水の小学校で終戦を迎えた。陛下の録音放送を聞きながら、中村局長はさめざめと泣かれたが、私にはどうしたものか、これという感動はなかった。むしろ、遂に来るべきものが来たという安堵感に浸っていた。〔『私の履歴書』〕

終戦とともに鈴木内閣は総辞職し、八月十七日に東久邇宮稔彦内閣が成立した。

この東久邇内閣の使命は、大きく言って三つあった。その第一は、敗戦のショックによって社会が取り返しのつかない混乱に陥ることがないようにするため、天皇の『終戦の聖断』を、軍ならびに、一般国民に納得させることである。むろん、若干の暴発はあったが、この内閣は、皇族、軍首脳部の協力を得てこれに成功した。第二は、日本の国がはじめてむかえる占領軍を無用の摩擦や抵抗なく受け入れるため、これに必要な諸措置を行うことである。同内閣は降伏文書への調印をはじめ、ほぼその軌道を敷くことができた。第三は、降伏条件であるポツダム宣言の実行であったが、日本社会をどう改革すべきかについて、占領軍当局と東久邇内閣との考え方のずれはあまりにも大きかった。昭和二十年十月四日、占領軍当局が「政治的、民事的、宗教的自由に対する制限撤廃の覚書」をつきつけ、政治犯の釈放、思想警察の全廃等を要求するに及んで、東久邇内閣はこれを実施できずとして総辞職した。わずかに五十一日間の短命内閣である。

津島寿一はこの東久邇内閣に再び蔵相として入閣し、大平もまた再び、後輩の宮沢喜一とともにその秘書官となったのである。

〔津島蔵相の〕麹町のお屋敷も永田町の官邸も戦禍によって烏有に帰したので、大臣は暫く碑文谷の石川さんのお宅に間借りをされていた。夜は一時二時まで平気で仕事をしていた大臣は、朝七時私が眼をさます時には端然たる姿で机に向われている。机上には十数枚の白い紙片に「次官へ」とか「主計局長へ」とかいう具合に、その日の仕事の指圖書をきれいな墨字で書いてあるのである。私には一体大臣は何時に就寝されて何時に起床されたのかさっぱり見当がつかかねた。

私はその紙片をもって大蔵省に登庁し各宛先に配ることを最初の日課にしていた。〔『素顔の代議士』〕

この二回目の秘書官時代に、大平は、毎日の津島蔵相の日程を野紙に記録した。それは『東久邇宮内閣大蔵大臣日誌』という表紙がつけられて残存している。

いまこれを追いつつ、当時の模様を想起してみよう。『回想録』資料編参照)

第一日目、八月十七日(金)は次のように記されている。

「二時 親任式

三時 閣議

四時 記者団会見

五時 新旧大臣事務引継

六時 " 高等官一同二対スル挨拶

六時十五分 部局長ト懇談

六時四十分 日銀正副総裁要談

七時 帰邸

金融局長、松山宗治両氏来邸、会食」

津島蔵相が就任にあたって最も心配したのは、財界、金融界が混乱に陥りはしないかということであった。もっと具体的に言くと、預金取付けなどがおこって銀行の休業閉鎖等に発展し、経済取引が麻痺するといった重大事態に陥りはしないかという懸念である。これを防ぐのが東久邇内閣の蔵相としての第一の使命であった。

津島蔵相は、関東大震災の際、銀行の預金支払制限、債務の支払猶予(モラトリアム)などの非常措置を講じたり、昭和二年の金融恐慌時には取付け騒ぎで銀行が休業し、財界は混乱したという苦い経験を持っていたので、なんとしてもそういう事態を招いてはならないと考え、就任第一日目に「どんなことがあってもモラトリアムは行わない」と声明した。

これが十七日の『日誌』にある記者会見の内容である。

次に津島蔵相が気にしていたのは、進駐軍の軍票使用問題である。もし米軍が日本で軍票を使い始めれば、敗戦により徴力化した日本通貨はその信用がガタ落ちとなり、また二種類の通貨の流通によって、敗戦後の経済は混乱の極に達してしまうであろう。

就任三日目の八月十九日の『日誌』には、「七時、久保外資局長ト会食ノ為帰邸」とある。大平が外資局勤務のとき総務課長だった久保文蔵は、このとき局長になっていた。津島蔵相は、おそらくこの会食の際、久保局長と軍票問題を論じたのであろう。

そのうちに、アメリカのラジオ放送で占領軍が軍票を使用しそうな気配が明らかになり、政府は重光外相を通じて、またマニラにいたマッカーサー元帥に日銀券の使用を要請したが回答はなかった。

津島自身の記述によると次のとおりである。

「……進駐軍の先遣隊は八月二十八日に、また、マッカーサー総司令官以下は三十日に、厚木へ進駐することになった。そこで、私は、渋沢日銀総裁と相談し、差当日日銀券十億円を限度として日銀の仮勘定で払い出してもらい、これを進駐軍に渡して、進駐軍の使用に供しようという非常措置を講ずることにしたのである。そしてまず、この現金の一部を厚木飛行場（その他横須賀、鹿児島鹿屋へも）へ、トラックで運び、これを米軍側へ手渡す手配をした。」（津島著『芳塘隨想』第八集）

政府は厚木に、有末精三中将を長とする厚木連絡委員会をつくって占領軍をむかえる用意をしていたが、米軍の占領の第一目標は横須賀軍港であり、部隊は厚木にとどまることなく、横須賀に近い横浜へむかった。したがって、津島蔵相の用意した日銀券は、これを渡す機会がなかった。

二十八日の『日誌』には、「六時、部局長会議（橋本書記官、厚木委員会ノ状況ヲ報告ス）」とある。

日本本土に米軍がはじめて足を踏み入れたこの二十八日は、大平個人にとっては深い悲しみの日であった。病床にあった母サクが郷里で他界したのである。享年七十二。だが、終戦処理に寧日なく働いていた大蔵大臣の秘書官の立場は彼に

郷里に帰ることを許さず、岳父の鈴木三樹之助がかわって葬儀に出むいた。

軍票問題は横浜の総司令部との交渉事となり、久保外資局長は自ら横浜へ出張して、軍票使用阻止の工作をはじめた。
降伏文書調印の日のことを『日誌』は次のように記している。

「九月二日(日)

七時 首相官邸

本日横浜沖ミズリー号上ニテ重光全権、梅津全権ト聯合國側トノ間ニ停戦協定調印サル。

午前五時全権一行ヲ送りタル早朝ノ官邸、肅トシテ声ナシ。

ところが、この日の夕方、総司令部から翌三日付で発表予定の布告案文が日本政府に手渡された。それは三号から成っており、第一号は軍政を行う旨のもの、第二号は治安維持、命令違反に対する処罰に関するもの、第三号は軍票の使用を行う旨のものであった。これを知って驚いた重光外相は、翌三日、横浜の総司令部にマツカーサーを訪ね、軍政反対の意見を述べてその中止を要請した。マツカーサーは外相の主張を入れ、軍政施行は中止された。

九月四日には、国会が開かれ、五日に、津島蔵相は衆議院で演説を行った。

『日誌』には、「四時、衆議院ニ対シ、インフレ対策、講述シ協力ヲ求ム(予算総会室)、講述要旨演説集参照、代議士堂ニ溢シ傾聴、予期以上ノ反響ヲ呼ビタルモノノ如シ」とある。

七日には、「六時、部局長招待(就任披露)、東洋経済ニ於テ、会食後懇談ニ入り、大臣ヨリ要請セル点左ノ通り、(イ)官権ニ依存セズ、実力ヲ以テ民間、同僚、下僚ニ対セヨ、(ロ)五ヶ条御誓文ニ昭示シ賜ヘル「公論ニ決スル」ノ精神ヲ以テ勇敢ニ討論スル良風ヲ醸成スベシ、(ハ)平和国家日本ノ建設ハ世界史上最初ノ試験ニ付「新日本」ノ含蓄、内容ヲ文化的技術則ニ構築シ、恒ニ世界水準ノ一歩上ヲ狙ヒ努力スベシ」と記されている。明治天皇の五箇条の御誓文の実践がそのまま日本の民主化である、という思想がこの内閣の首脳部を支配していたことは疑いが無い。

『日誌』をつづける。

「九月八日（土）曇、九時二十分、登庁、マックアーサー司令部及八 名ノ米兵第一次東京進駐。進駐区域ノ一部交通遮断、都内平静ナリ。……」。

「九月九日（日）快晴……四時四十五分、外資局関係会議（連合国軍使用通貨問題）……」。

重光外相のマックアーサーへの直訴によって、軍政への移行、軍票使用は一応阻止されたものの、総司令部は軍票については、形式上、いつでも発行するという方針を貫いていた。しかし、折衝の結果、占領軍が日銀券を使用してもよいということになり、九月七日には、占領軍が日本に駐留するため必要とする資金として一億円が提供された。これによって、軍票使用阻止工作は實際上成功し、日本は占領による通貨の混乱を免れたのである。

ついで、占領軍は大蔵省庁舎の接收を申し入れてきた。

「九月十日、曇、間々霖雨アリ……七時二十分、終戦中央事務局成田第一部長来訪、連合国総司令部ニ於テ『大蔵省庁舎ヲ明渡スベシ』トノ要求ヲ膺ス、一同愕然タリ、種々打合ノ上、善処スルコトトセリ……」。

だが、結局、翌十一日には、十五日正午までに大蔵省庁舎を占領軍に引き渡すことが正式に決定され、津島蔵相は狸穴の満鉄總裁の官舎にうつり、各部署は、日本勸業銀行、内務省、東拓ビル、東京証券取引所、四谷小学校などへ分散した。全部局が霞が関の古巣へ戻ったのは、十年後の昭和三十一年三月のことである。

「九月十四日（金）曇、十時、閣議、一時、登庁、霞ヶ関最後、局長会議開催、引渡直前、大臣室頗ル閑散。庁舎引渡シ準備ニ各局大重。車馬輻輳……」。

この日、津島蔵相は関西方面への旅に立った。同行者は、大平、宮沢両秘書官である。翌十五日は伊勢神宮参拝、十六日は橿原神宮参拝などを行って、夜、京都に泊った。

「七時、無隣庵ニテ日銀主催ノ懇親会ニ出席ス。祇園ノ妓六名侍ルアリ、京都言葉ノ煽々タル、尽キ又情緒アリ」と、『日誌』子は詠嘆している。

翌十七日、大阪では、官界、財界の人々と懇談、十八日に帰京した。

「九月二十二日（土）曇時々雨」には、再び『日誌』子の所感が記されている。「二十四天気沈鬱、楽シマズ。大臣室ノ会議八稍々冗長ナランカト思ハレル。事務能率ノ發揮ニ八其ノ方法ニ革新ノ要アルベシ。」

九月二十三日に、津島蔵相はマッカーサー元帥を訪問した。この時の模様を要約すると、次のようである。

津島蔵相は、かねて終戦連絡中央事務局を通じてマッカーサー元帥に会見の申入れをしていたが、間もなく、総司令部から九月二十三日に会うという返事がきた。これを大平秘書官が津島蔵相に伝えると、蔵相は、「それはおかし、たしかにおかしい」と独り言を言った。

「どうしておかしいのですか。」

「その日は、秋季皇霊祭で日本の大切な祭日である。日曜、祭日に、仕事の件で面会のアポイントメントをとることは、失礼千万である。敗戦国とはいえ、私は、天皇から親任された国務大臣である。したがって、この措置は日本国に対する非礼であると思ふ。このアポイントメントは断ることにしよう。」

大平は驚いた。マッカーサーと言えば、当時は天皇の上に位置する人である。折角のアポイントメントを日本の蔵相が断つたら、どんなことが起こるかわからない。

大平は津島蔵相を説得した。

「ご説はごもっともであります。日米間にはまだ講和が成り立っておりません。いわば戦争状態であります。いわば野戦の幕営で会いますよと言つのですから。この際は、そのエチケットを守らなくとも、とがめる筋合ではないと思われま。お受けされるのが至当ではないでしょうか。」

津島蔵相は不承不承、大平秘書官の進言を容れて、宮中における秋季皇霊祭の祭儀を終えたあと、午前十一時に第一相互ビル七階のマッカーサー司令官の部屋を訪れた。すると、待ちかまえていたバンカー副官は、「実は元帥はきのうの午前十一時に貴大臣の来訪をお待ちになっておりましたが、お見えにならないので残念でした。いま幕僚会議中ですが、すぐ

お目にかかっていただきます」と言つ。

この行き違いは、総司令部と終戦連絡事務局との間の連絡上の手違いによるものであつたかもしれないし、あるいは津島蔵相の不機嫌を察して、なんらかの配慮が日米事務局間で行われた結果の演出であるかもしれないが、その真相はいまでは知るすべがない。

津島蔵相の顔は見る見るうちに明るくなり、連絡の不備による非礼を詫び、元帥の部屋に導き入れられ、元帥と蔵相の通訳ぬぎの小一時間にわたる会談が行われた。話題の中心は、当時困窮の極にあつた食糧問題の打開策に関するものであつたとされている。

「会見を終つて、司令部を出た津島蔵相は極めて明るい表情で馬鹿にお機嫌がよかつた。車中私に、『さすが元帥の副官は行届いて丁寧な秘書官だね。立派なものだね』と言われた。これは多少、あてこすりだと思つた私は少々癪にさわつて、それに引換え大臣はくうたらな秘書官を抱えられてさぞ御迷惑でしょう』と言ひ返してやつた処が、大臣はからからと何々大笑された。この軽い笑声をのせて車は真昼の陽光を浴びて都大路を疾走してゐた。」（『素顔の代議士』）

九月三十日は日曜にもかかわらず登庁し、朝から会議が二つ行われた。四時、一旦帰邸しているが、「六時再び官邸。二登庁、植民地、外国等ノ銀行・開発会社及特別戦時機関ノ閉鎖命令二対スル協議ノ続行、十月一日五時二及フ、翌朝五時三十分帰邸」とある。

この日の模様がどうだったか、大平の文章を見てみよう。

「マッカーサー司令官は、日本政府に覚書を交付して、朝鮮銀行と台湾銀行との閉鎖を命令してきた。この覚書を受取つた大蔵省は異常な衝撃を受けて当惑した。早速省議を開いて善後策を協議した。その席上大臣は、当時の金融局長（式村義雄）に対して、極めて不機嫌にかつ語気荒く次の様にいわれた。

「一体君はこの覚書を、はい、かしこまりました、といつて受取つてきたのか。君も承知している通り銀行には数多くの

預金者がある。その預金者の中には専婦もおれば孤児もいる。その人達は預金の引出しを禁止されて、明日からの暮しをどう立てたらよいかというので今頃は碌々眠れないことだろうと思う。もし私が君であれば、その覚書を交付された時、直ちに司令部の係官に対して、この預金の始末を何時までにどうつけるかを念を押してからでないと、これを受取るわけにはまいらぬといって頑張るよ。少しは寄辺のない預金者のことを考えたらどうだね」と。

この言葉には誰からも一言半句の弁解も抗議もなかった。そこでその夜はその善後対策のため省議が徹宵続けられた。夜が深々と更けわたる二時頃であつたろうか、局長一同には疲労の色が歴然と見えかけた。たまりかねた私が傍から大臣に向つて、「大臣、この作業は明朝更に続けることにして、今晚はこの辺で打切られては如何かと思ひます。次官や局長の中には大臣のように健康に恵まれていない方も居られるし、また家庭においても多数の子供さんを抱えている人も多い（津島さんには子供がいない）のであるから、差出がましいがこの辺で省議を中断して明朝再開ということにしたいと思ひます」と進言した。

ところが大臣の顔はみるみる紅潮をおびてきて、「この国家非常の時に、そのような心懸けでどうするのだ。さつきから見ていると隣の席の者と時計を見合せたりしている不心得者がいる。そんなに細君が恋しいかね。もし腹がすいたというのならこの津島が握り飯ぐらい食わせてやる。大体君（小生を指す）もそんなに細君の顔がみたいのかい」と逆襲される始末で手のつけ様がない。そこで漸く山際次官と愛知文書課長の二人が明朝八時までに対策の一切を二人でねつた上、大臣のお屋敷に参上することだけにつき、省議は朝三時頃散会となつた。

翌朝山際次官と愛知文書課長は約束の八時にちゃんと長文の司令部に対する嘆願書（英文）と善後措置要綱を携えられて碑文谷の石川邸（津島の寄寓先）の門を叩かれた。それから本件の交渉が軌道に乗つたのである。（同前）

『私の履歴書』には、その朝、「その人達の来意を告げたときには、すでに津島蔵相は羽織袴の端然たる姿で机に向い、執務されているのであつた。私にはあの時の強い感動がいまなお忘れられない」と記されている。

津島蔵相に叱られた思い出は、当時の津島の身辺にいた人々はみな持つており、官房長だつた福田起夫（のち内閣総理

大臣)は、次官以下の幹部が夜八時頃から「何と八時間に及ぶ訓辞」を受けたことを記している。「実直な山際さんは、直立して不動の姿勢で拝聴。福田、宮沢は坐ったままで適当な相槌、大平は、終始頭を下げていたが、恐縮して拝聴していたのではなく、そんな格好で睡をとっていたらしい。」(『回想録』追想編)

大平は、この夜のことについて、「大体役人というのはおしなべて事勿れ主義者であり、一つの目的を追い求めて飽くことを知らないなどという熱情には乏しいものである。国民の利害休戚ということに鈍感になりがちなものである。役所仕事自体にそういう性質がまわっているものである。その積弊を津島蔵相はこういうやり口で矯められたのである。疲労と睡気で床急ぎをしていた私は、横面を大きくたたかれたような緊張味を感得した。」(『素顔の代議士』)と書いている。

このころ東久邇内閣は、重光外相が総司令都の不興を買ったため辞任した後をうけて吉田茂(のち内閣総理大臣)が外相の職についていたが、その命運はもう旦夕に迫っていた。

十月五日、東久邇内閣は総辞職した。残念ながら、十月五日の『日誌』は欠落している。

すでに記したように、大平は、戦争末期に空襲で家を焼かれ、世田谷区烏山の仮住いで終戦をむかえたが、終戦後比較的早く、疎開していた家族と一緒に住まうことができた。九月下旬、岳父の鈴木三樹之助が駒込林町百五番地に家を手に入れ、そこへ同居することになったからである。

この家は、解散した産業報国会が借りていたもので、もともとの持主は、荻生徂徠の末裔、大給子爵であり、敷地は千二百坪、床の間や畳廊下がついた十五畳、十二畳などの大きな部屋があり、居間だけは爆弾で吹き飛ばされていたが、四尺五寸の襖、玄関の群戸、車夫待ちの部屋、屋根付きの車寄せ、赤銅屋根の門など、時代劇に出てくるような大名屋敷だった。

焼野原の東京には、疎開地や外地から引き揚げてきて、住むところがなかった。したがって、この大きな家には、あちこちの鈴木家や大平家の関係者が同居することとなる。最も多いときには、鈴木三樹之助夫妻、大平一家、その他七所帯が在住した。そのなかには伊東正義一家もいた。伊東は前述のように興亜院で大平と机を並べた仲だが、終戦時には中

国の済南にあり、二十一年三月に引き揚げてきた。大平は彼が住居に困っているのを知って、自分たちが使っていた一室を提供した。以後二年間、伊東はここに寝起きし、その後生涯にわたる友人となった。

この家の庭には、樹齢五百年に及ぶ銀杏の樹があり、最寄の日暮里駅のホームから見えるほど大きかった。